

# 最高裁で確定

## 「九条俳句 不掲載は違法」

集团的自衛権行使容認に反対するデモを見た女性の詠んだ俳句が大きな社会問題になった。公民館の教室でえらばれた秀句が、公民館報で「政治的だ」と掲載が拒否された。女性(74)は「俳句は文芸作品。掲載拒否は、学ぶ権利を保障する公民館の役割から逸脱する」と裁判を提起。有名な九条裁判である。地裁、高裁はいずれも原告を支持。最高裁は問題発生から四年経った去る十二月二〇日、原告支持の決定を出し、確定した。

この事件、意外な展開を見せる。俳人の故・金子兜太さんが「戦前の俳句弾圧事件を繰り返すな」と、東京新聞紙上で「平和の俳句」を呼びかけ、四年以上の連載が続いた。また金子さんが呼びかけ、上田市「無言館」近くに「俳句弾圧不忘の碑」が建立された。

金子さんの事は、今年二月「和」会報No.669に「忘れてはいけない人」で特集しました。

(関連資料・9頁に)

東電裁判で検察は幹部に懲役5年を求刑した。なんと軽い求刑かと思った。そうしている間にも凍土壁から洩れ続ける汚染水。醜悪で冷たい汚染水は、安倍政治の骨の髄まで染みこんで国民を締め付けていく。来年は選挙の年。(周)

### 今月秀句

凍土壁破って洩れる汚染水  
冷たさが骨の髄まで凍む政治

遠田 亀公子

中野 林

### 例会案内

1月例会	1月28日(月)
投稿締切	26日(土)
課題「遺」	3句以内
自由吟	5句以内
自選句、自解筆もぜひよろしく。	

### ◆ 目次 《付録：差し込み地図》

川柳互選	2
課題吟「凍」	3
自由吟	5
自選ノ連作	7
石川さんへの献句	8
ほのぼの川柳	9
プロレタリア文学運動の盲点	12
考察 戦争文学と鶴彬	16
写真資料など	12
シベリア抑留の記録③	16
故・秋山茂氏の手記	12
報告・後記	16





2	安倍のいう「この道」伴侶と歩む気なし	徹乗	5	断固やる民意も美の海に捨て	白真弓
2	命まで 任せ過ぎです 政管に	広助	5	漂着船ハンゲル文字が痛ましい	未知子
2	まずいずも白骨の道空母にし	一角	5	人買いは昔も今もウソばかり	一角
2	聴く耳故障米のロボット修理せよ	未知子	5	大嘗祭あのひと言はその通り	ダン吉
3	昭和史を彩る鶴一ページ	ダン吉	5	辺野古基地サンゴ・ジュゴンも怒る海	宏
3	政権にべつたり「寄り添う」NHK	林	5	改憲が踏み絵にされてきしむ国	亀公子
3	過ぎ去ったあの日を糧に生きている	ダン吉	6	脱退は大戦前夜のキーワード	立東爺
3	壇上で野党見渡し薄笑い	未知子	6	戦争でもないのに飛行機と兵隊よく落ちる	大峰
4	草の根で年金下げるな大声で	和子	6	この社会 無関心選挙が生まれました	未知子
4	政権は 沖縄を無視 天皇寄り添う	広助	6	屈服はしません辺野古が勝つまでは	亀公子
4	九条が泣く止めて下さい武器売買	未知子	6	教育費年金削り武器爆買い	白真弓
4	行政府 立法司法握りしめ	白真弓	6	防衛費福祉をよそに青天井	亀公子
4	空母進水！目覚めろ！ぼーっとした人よ	徹乗	6	ふるさとを愛する心埋める土砂	林
4	暴政に鉄槌くだせ蟻の乱	亀公子	6	日韓の 戦後が消せない 少女像	広助
5	闘いはまだ半ばとおぼあ座す	白真弓	7	爆買いのステルス100機ローン組む	立東爺
5	四十六都道府県と一植民地	林	7	五輪旗の裏に利権屋トグロ巻く	亀公子
5	北方二島米軍基地が口を開け	白真弓	8	人間を見限ったのかジュゴン去る	白真弓
5	戦前は遠く 戦雲は近くなる	広助			

今月の  
自選・連作

◆ 連作「母」 遠田 亀公子

負け戦母の背骨をねじ曲げる  
息をするだけの母にも来る納税  
毀れゆく母の切ないアリガトウ  
おのが母泣かせた国に抱くこぶし  
沖繩の母に不戦のDNA  
赤子抱く母にも冷めたい罹災証

◆ 自選句 前田 大峰

国会の貧乏神を叩き出す  
西側に安保疲れと若いデモ  
安保の底からポンコツ兵器の注文書

◆ 闘病 白真弓

・頑張りも間違えればご迷惑

・ストレスを解放せよと警戒音  
・一周年一人グラスを傾ける

今回は、なんといつても辺野古ですね。たくさん出来ましたが、なんか陳腐で……。もつと発想を柔軟にしなければと、反省しています。

闘病句の1句目は、ストレスを感じた腫瘍が、何とかしなければと頑張つてしまい、間違えて大きくなつたみたいです。笑っちゃいます。腫瘍も身のうちです。

◆ 自選句 中野 林

年の暮れ改憲タカ派地に落ちる  
国民と共存できぬアベ煩惱  
六年間煽り運転繰り返す  
戦争へ煽り運転する政府  
人間が人手不足で消耗品  
平成の徴用工か使い捨て

今年もお世話いただきありがとうございます

た。素敵な会報にも感謝です。来年もよろしく  
お願いいたします。

### ◆自選句 松和子

- ・全国が沖縄守れと唱和す
- ・知事居るよなぜ沖縄に え新基地

### ◆お詫びと驚き 白山 未知子

今回の句の選考結果をみて驚きました。なんと私の推敲中の句で投句しないはずの句が多数載っていたのです。しかし没にしたはずの句の中に皆さんの高評価いただいた句もあったのに驚いてしまいました。例えば課題句ですが、最初は、

- ・漂着船ハングル文字に胸凍る

としたのですが、自分の胸が凍るだけでなく、この船で荒海に漕ぎ出した人の心中を思い、辞書では「ハングル」だけで「ハングル文字」を表していたので、「漂着船ハングル不憫身も凍る」と

して投句しました。二票獲得？でした。逆に投句する予定でない「…ハングル文字に胸凍る」のほ  
うが載ってしまい、八票獲得でした。

私はまだまだ青二才（？）の川柳初心者。今後ともよろしくご指導下さい。

どうぞよいお年をお迎え下さい。

（未知子さま、申し訳ありません。どたばたと  
未確認のまま、書かれたメモを打ち込みました。  
けれど結果的に、分かりやすい方が他人に伝わ  
ることがわかりましたね。 編集子）

### ◆岡田仁さんより電話あり

みかん農家に手伝いに行っています。先日お送りしたミカンですが、選果もしていないのを送りました。すみません。句報楽しみにしています。

（仁さんは、「和川柳社」の創設者、故・岡田一  
杜さんの甥っ子さん。一杜さんの思い出を前号  
に書いていただきました。なお届いた長崎のお

いしいミカンは「鶴彬を顕彰する会」理事会が

開かれたので、皆さんと美味しくいただきました。

ありがとうございます。

◆ おたより 小山広助

12/15…大阪から鶴彬の演劇を見て感動して来ました。12/22…金沢川柳句座、没句供養川柳会があり参加、没句8句持参。12/23…突然に資料館見学あり。

◆ おたより 岩佐ダン吉

(投句遅くなり)すみません。演劇のチケットなどの処理をやっていて又また投句を忘れていました。それにしても『鶴彬・暁を抱いて』九〇〇余人で立見まで。石川の仲間のご支援に感謝。

恐らく来春の後半に「再演」となるでしょう。DVDも完成しました。どうぞ良いお年を。

◆ ほのぼの川柳 《投句歓迎》

最近もうかえるは「も」とりようかい「り」で通じるお知りあい

携帯がスマホに替わって誰でも持つようになった。メール一本、帰宅することができ。トラブルもありそうだが、便利から不便に戻することは出来ない。

この夏、毎日新聞に載った次の川柳、誰に話しても大笑い。傑作だった。

・死にそうとメールしたのに了解と

・同人の大峰さんが現在、腰を痛めて入院し、リハビリに挑戦中。高松川柳会例会で寺内さんが詠んだ次の一句を短冊にして持っていった。  
・寝たきりになってたまるか杖をつき 徹乗

生活川柳「ほのぼの川柳コーナー」を新設。いかがでしょうか？(周)



## 石川さん逝く

2018.12.19

## 石川雅明さんへの献句

偲ぶ会の参加者に献句をいただいた。

口悪く口のガンでも 口悪く 激団トラベルボンバーズ主宰 熊野盛夫

石川さん感謝してもしきれません 紅茶好き

シンジユース 断ることがもう出来ず naonuu

おさんぽで おいしいクレソン 食べました Hisako

あの世では風呂に入ろう石川氏 俺様

石川の空にあなたの星灯り 土の音

国会の図書館よりもみんなの心のライブラリー まーぼう永久文庫

繋がりを創ってくれておおきにね！ アロハ屋のナラ

死ぬ死ぬと言っはいたが早すぎる… 田尻敦彦

クレソンのかおりするたび思い出す（だろう） 吉田

石川さん ありがとうがとう ありがとう 白山未知子

先駆ける道半ばなり巨星落つ 周立東爺

### 石川雅明さんの紹介 / 金沢の市民運動に大き

な足跡を残している。東大同窓の佐藤優氏は旧知の仲。長年フリースクールを運営、青年への独特の塾も主宰。町づくりや商店街再興にも盡力。石川県立公文書館建設を長年訴えてきた。県は新設する県立図書館に公文書館並立を決めた。彼の大きな実績の一つである。激団トラベルボンバーズの

俳優でもある。ささやかな骨揚げのとき、子どもを抱いた女性が「石川さんのおかげでフリースクールで学び、お互い結婚もできました」と手を合わせておられた。「和」の会報を読むのも彼の楽しみだった。身よりのなかった石川氏の手伝いをさせてもらった。山菜採りが楽しい思い出である。享年七〇歳。（周立東爺・渡辺寛 記）



石川さん、3年程前、生前葬をやってくれと頼んだ。頼まれた熊野盛夫氏、主宰する劇団で「ザ葬式」なるパロディ劇を創作、東京で公演した。主演はもちろん石川さん。

2018.12.24

★

川柳也俳句の勉強も  
してあらず。  
時々言葉遊びを思っ  
つくような私ですが…  
言いたい事は、  
いっぱい！ デスヨネ

私は、今日(12/24)は、  
深夜にカトリック教会  
のミサに参ります。  
すてきですよ。 ★

未知子様  
メリークリスマス！  
毎月の会報を  
お送り下さり、また、  
メッセージをいただき、  
ありがとうございます。  
皆様のお作は、おぼ  
らいですわね。  
またよろしくお願  
いいたします。

能沢 菜

能沢菜さんからクリスマスカードが  
届きました。



←無言館



↑金子兜太さん (2月20日没)

〒386-1213 長野県上田市古安曾字山玉山山 3462

TEL: 0268-37-1650

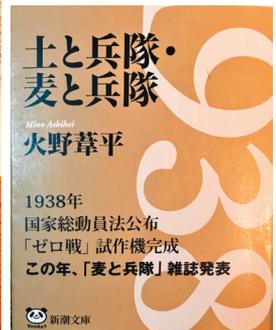


←俳句の弾圧不忘の碑

火野葦平『土と兵隊』初版本



戦后再版された文庫版



## プロレタリア文学運動の盲点③

## 考察——戦争文学と鶴彬

周 立東爺

前回にも書いたが、鶴彬も参加した「プロレタリア文学運動」（以下、プロ運動）が戦争をどう描いたか調べている。確かにプロ運動は戦争が大きなテーマなのだが、作品としてはほとんどない。

戦争に関しては「戦争文学」と分類されるものがある。当時の日本の戦争文学についてフリー百科事典『ウィキペディア』は次のように説明する。

……日華事変勃発とともに、出版社の依頼により作家が戦地へ派遣され、多くの報告文学が生まれた。その中で南京攻略戦に従軍した石川達三「生きてゐる兵隊」は戦争の残酷さを描いたことから発禁処分を受ける。また上田広は鉄道

部隊の労苦を描いた「鮑慶郷」「黄塵」などを戦地で書き、天津・北京を見た尾崎士郎は「悲風千里」で中国民衆への同情もにじませた。

1937年に戦地で芥川賞受賞の報を受けて注目され、翌1938年に軍報道部員として徐州会戦に従軍していた火野葦平の戦闘体験を記した「麦と兵隊」は、国民に喝采をもって受け入れられ一〇〇万部ともいわれるベストセラーとなり、火野は続いて「土と兵隊」「花と兵隊」などを発表した。終戦とともに戦犯作家として休筆を余儀なくされている。

前号に紹介したように火野葦平は「戦犯作家」というのはいかなものか。『麦と兵隊』は読めば容易に分かるように戦意高揚を煽る作品ではない。

（紙面の都合で、次号につづく）



前回までのあらすじ

如何なる場合でも戦争は避けねばならぬが、防ぎ得ない人間の弱さを持つてる。父祖の歴史を知ってもらい逝った五万余の霊も願うだろうと思ひ稿を重ねた。

満州国陸軍鐵路警護兵上尉という肩書きで昭和二十年三月、北支に派遣され、その年の暮れ、奉天（今の瀋陽）でソ連軍のゲバウに捕えられた。経歴の警察主任がばれていたら銃殺刑に処せられていた。そのとき「私は満州国陸軍の将校で、将校でも戦犯でもない」と主張し列車に乗せられた。《中見出しをつけました。（周）》

## 逃亡者続々、発砲音鳴りやまず

隊列の前の方で逃げる者があると思うと、同時に後方で、或いは中央で、というように警戒のソ連兵は応接にいとまなしというより寧ろ右往左往という

言葉があてはまるような狼狽振りでも唯スカレー、スカレー（早く早く）を連発していた。一時間余りで北奉天駅に着いたが、列車が入っていない為に中ホームと外柵の間の草原で待機することになった。われわれの集団の周りの要所要所にはソ連兵が焚き火しながら警戒配置についている。われわれも寒さに耐えられず、あたりに散乱している木片や古枕木などを集めて焚き火をはじめた。明るい焚き火に映し出した誰の顔も張りつめた気魄きはくが異様なまでに顔面に現れていた。

午前二時頃、突如けたたましい銃声が数発続いて又、逃亡が始まったのだ。私は焚き火の傍らで人ごどのようにこれを眺めていた。墨絵に似た黒い人影が一人また一人と向い側の煉瓦造りの満人家屋の影に吸い込まれるように消えていった二三人のソ連兵が大声でわめき駆けだしながら、人影に向かつて発砲しているが命中した気配はない。月は大分西の空に傾いている。あたりは又元の静けさに戻った。

ふと気がついて見ると、私の分隊の現役兵林某の姿が見えない。きつと先刻逃亡したグループの中に居たのだろう。後で思うと夫れと察しられる節がないではなかった。というのは、北奉天駅に着いて直ぐ林はわたしに向かつて、

「秋山さん、自分の背囊をあげましょう。衣類缶詰餅などが入れてありますよ」

「君は？」

「自分は雑囊だけで沢山ですよ。重たくて仕様がなから……」

私は親子程年齢のちがう林から背囊をそっくり貰い受け、急に物持ちとなり現役時代着用した防寒襦袢や跨下を再び着ることが出来た。林は暫く一等兵になつたばかりの二十一歳で小柄な童顔の青年で同じ分隊員である諏訪、山本という二人の兵隊と共に他の年配の分隊員（招集兵四警察官一奉天市民四軍属一）の命ずるまませつせと働いて居た。

然し現役 of 兵隊達が今此処で逃亡に成功したとし

ても北奉天駅（瀋陽）から日本人の居住している奉天駅前地域に出るためには複雑な満人街を通らねば行けないから余程地理に明るい者でない限り不可能ではなからうかと一抹の不安に襲われた。

### 奉天駅で連京線に入り北へ

#### 満鉄社員に妻子あての手紙を託す

焚き火の残りが少なくなり東の空が白みはじめた頃、有蓋貨車十数両を連結した貨物列車が到着、われわれは示された十トン貨車に一個小隊全員が乗車、直ぐ車内中央にストーブを据えドラム缶に水を満水にして積み込み、中央から両側を二段造りとして分隊毎に位置を定めたが発車の気配は更になく、外から扉を閉められたので、目的もなく何らかに役立つだろうというので兵隊が持ち込んだ鉄切り用の鋸のこぎりで先ず床板を切つて便所を作り次に採光と換気のため側板に小さな窓といつても寒気の入ることも考えて中五センチ長さ二十センチ程の穴をあけた。半日位経つて午後四時頃よつやだろうか、漸く発車。な

つかしい奉天駅で連京線に入り北行したが鉄岑駅に停車した時、各車から三名宛下車し前部に造られた炊事車から石油缶で作った器により雑炊が分配された。ここに三時間余り停車後発車したが、その後も何回か停まつては発車を繰り返し、新京に着いたのは真夜中頃だったと思う。この間に私は「鉄岑」と「公主岑」で二回検車のためこんこんと車輪を叩き乍ら巡回して来る日本人の満鉄社員にかねてから手帳をむしった一葉に、「何処に行くか判らぬが俺のことは心配無用一日も早く日本へ帰れ。子供達のことは呉々も頼む。奉天朝日街満鉄社宅十八号鈴木海三方秋山芳子殿」と走り書きしたメモを準備していたので、「奉天の朝日街満鉄社宅に居る家内に渡して下さい。お願いします。」「分かりました。何とかしますから…、お元気で」

という返事に肩の重荷が少し軽くなったような気がしたが、貨車の側板を隔て、息を殺しての会話にもどかしさを感じながらも藁わらをも掴つかむ気持ちで一縷いちる

の望みをつないだのである。然し私が逮捕連行されるのを目撃した鈴木から一部始終を聞いたであろう妻子の驚きと嘆きを思うと胸が痛むのをどうすることも出来なかった。

列車が停車中、警備のソ連兵は貨車の上をゆっくりと動哨していたため、この連絡を発見されることはなかった。新京に列車が着くまで急造の便所から進行中脱出するもの、停車水汲中逃亡するもの、など後を絶たずその都度起こる頭上の銃声に「無事逃げて呉れ」と祈りながら、表面苦笑いし顔を見合わせるわれわれであった。

### 停車する毎に知らない駅名が次々と

輸送中一番自由に振る舞えるのは機関車の次に連結された炊事車に勤務する軍曹を長とする数名の人達であった。彼等は警備のため最後尾の車両に陣取っている二十名近いソ連兵のスープなども作っていた。

ところが、翌朝六時頃新京を発車した列車は覗き

窓から見たところ北上しないで西南方に向かつて走っている様子である。然も停車する毎に覗いて見る駅名は知らないものばかりであったが、漸よそよそく白城子に向かつていることが分かった。京白線を走っていたのである。

然し何時になつても「飯あげ」の知らせがない。不思議に思つて聞いたところ、炊事班は班長の軍曹以下全員が逃亡してしまい、藻抜けのからとのことである。然し流石に此処まで来ると脱出者も減り、各車毎に炊事しながら昂々溪に着いたのは奉天を發つて三日目のよく晴れた朝であつた。

### ファシストと睨まれて連れ去られた大隊長

われわれ、五十九大隊の大隊長は陸士出身の藤原大尉で露語が堪能ということであつた。中隊長は北海道出身で航空兵の仲原中尉、この人は仲々スタイル屋らしく短い飛行靴を穿いて出歩いていたが、翌年四月二十九日の天皇誕生日にアンガラ河上流のバ

ンキーという山中の伐採地で中隊全員を集め、国歌を歌い国旗を掲揚し、遙拝式をやつた為、ファシストというのでソ連軍から睨まれ、何れかに連れ去られてしまった。

小隊長は第一小隊が満軍中尉の武内少尉（長野県出身）。私の所属した第二小隊長はやはり満軍で武内少尉と同期の新潟県佐渡出身の大口少尉。捕虜は誰が定めたのか満州国軍の将校は何れも一階級下げられていた。

然し仲原中隊長はじめ、大石、武内両少尉とも年齢的に又前歴からしても私より下級者であると感じてか何かと私を庇護するように取り計らつてくれたのが有り難いことであつた。

### 狩り出された日本人同士、千万無量のいたわり

列車が昂々溪駅の側線に進入した時はじめて扉が開けられ私達は冷たい外気を胸一杯に吸うことが出来た。見れば隣りの側線では狩り出された市

民がソ連兵の叱咤を浴び乍ら無蓋貨車に米の積み込み作業の最中であつた。

「兵隊さんご苦労さんです。何処から？」

「奉天からです」

「何処へ？」

「判りませんわ」

「寒くなりますから元気で……。米あげましょうか。落としますよ」

上と下の短い会話の中にも日本人同士、千万無量いたわり合う思いが込められていた。

麻袋一杯の米がどさつと落とされる。

「それっ」というので素早くこちらの貨車の中へ、又一袋続いて又一つというように三袋の米を積み込んだところ警備兵が来たので中止になったが、見渡す限り何百という車両に市民が蟻のように働かされていた。これらの人達は目前に迫った冬をどうして越すのだろうと思うと胸が疼いた。

斯うして思わぬ収穫にありついたりわれわれは早

速車内で炊飯、久し振りに米飯にありついたりせいか元気が出て来たように見えた。三袋のうち一袋はもち米であつた。

この朝の収穫はわれわれの車両だけでなく、どの貨車にも米が搬入されたらしい。私達は使役で働く在留邦人に心からの挨拶とお礼を述べ再び貨車に閉じこめられ、北滿鐵路に移つて「シベリヤ行き」と覚悟をきめ、国境の町満州里に着いたのが十一月三十日の夜で覗き窓から見た夜景は町らしい黒々として家屋の集まりが見えるだけであつた。

「櫓そりの鈴さえ寂しく響く雪の眩野よ街の灯よ」と東海林太郎が哀調を帯びて歌つた「国境の町」が偲ばれたけれど、凍りついた街路に御者も馬も顔一面を真っ白に鈴の音も高らかに走る昨日の姿は最早何処にもなかつた。

【第一章（逮捕と連行）終り】

【次回は、第二章（シベリヤ入り）】

## 報告などいろいろ

◆大阪「あかつき川柳会」が協賛する「劇団きづがわ」の演劇「鶴彬―暁を抱いて」を石川県から5名で観劇してきました。正統派鶴彬の生涯を見せていただきました。キャストはみなさんプロだとのことで、声はとおり、すくと胸に響きます。熱演が伝わってきました。吉橋通吉さん原作を元にした脚本で、説得力があり、来年には、再演することのこと。

◆「あかつき川柳会」の会報が届きました。

## 1月例会「案内」案内（毎月第4月曜日）

- ◆1月28日（月） ◆×切：26日（土）
- ◆課題「遺<sup>いのすゝめ</sup>」 3句以内 ◆自由吟：5句以内
- ◆自選吟、連作、エッセイ、川柳論、ご意見などもお寄せ下さい。 ◆会場：金沢市金石（乞<sup>ご</sup>連絡）
- ◆句報を持参下さい。例会で話し合います。
- 投稿 FAX(076) 254-0762
- メールアドレスは下段に。

郵送は  
下段住所へ。

巻頭に岩佐ダン吉さんのエッセイが載っていた。曰く「60〜100歳までが川柳適齢期である。」と。なるほどなるほど重鎮のお言葉感謝です。

◆一面の「九条俳句不掲載は違法」のニュースには最近の司法反動化の中、久々の朗報でしたが、公民館など公共施設使用を認めない例が各地で発生。金沢市でもこれまで広く市民に開放されていた市役所前広場を「政治的使用」だとして不許可。極めて政治的な決定が行われ、裁判になっている。（周）

## ◆編集後記

◆投句の選考は各結社、様々なようです。ただ選者が一人の時、どうしてもその選者の句風に沿った作句をしがち。合選の場合、選考に参加できない方の問題も出て来ますね。（編集子）

和川柳社 // // // //

金沢市金石東2丁目15-30（渡辺方）

電話 FAX：076-254-0762 PC-mail：kananabe@popolo.org

携帯：090-9445-1302 携帯 mail：kan-wata@i.softbank.jp

振込先：北國銀行中央市場支店 #191 普通 640「和川柳社」